

第3回 新潟市都市計画マスタープラン策定検討委員会 議事概要

日 時： 令和3年2月12日（金） 午後2時～4時10分

場 所： 古町ルフル4階 401会議室

出席者： 新潟市都市計画マスタープラン策定検討委員会

佐藤由香子委員、佐野可寸志委員、鈴木孝男委員、富山栄子委員、
樋口秀委員、柳沢厚委員

オブザーバー

大花博重（新潟県土木部都市局都市政策課長）

事務局

松島秀樹課長、佐藤功一課長補佐、淡路千尋主幹、阿部貴行主幹、
江口泰弘副主査

欠席者： 小池由香委員、田村圭子委員

1 開会

2 挨拶

3 議事（意見交換）

（1）前回のふりかえりについて[土地利用の基本戦略案と関連制度]

（事務局） 資料説明

（佐藤委員） 今回の空き家の問題もあるが、今回の雪で普通に居住をしている方から、屋根と小屋がつぶれたとか、古い住宅の塗り壁が落ちたとか、建築の建物の雪の被害が私のところだけで4件ほどの相談があった。その中で、この空き家対策として、資料1の3ページに「空き家を除去してコミュニティ農園として活用（中央区）」とあるが、これはとてもよいことだと思う。今、市民農園がとても人気で、どこかに市民農園を貸してもらえないかという問い合わせが私のところにも多く来ている。しかし、西区の黒埼の方が一番近い市民農園で順番待ちしているのが赤塚と言っている。

こうした危ない空き家を活用するため、何とか除去して、市民農園として貸し出しができればよいと思う。

土地を持っている方や市民農園として貸してもいいよという条件の中で、例えば、少しでも固定資産税が安くなるなどのメリットがあり、市民の方に市民農園として提供してあげられれば、環境も安全性も高まるのではないか。

（事務局） 建築部で空き家対策をやっており、その中の一例として例示している。市民農園は区役所が窓口だと思われるが、このような事例を積極的に行っていて税控除もあるのかどうか、次までにその辺が分かるようにしたい。

(樋口委員) まちなか居住を進めるにあたり、まちなかにこのような空間があるとよいかも。都度「まちなかに居住してください」と言って、農地が遠いと移動するのも大変なので、このようなものを推進しようとするならバックグラウンドの支援があればよい。

(柳沢委員) 今後の土地利用の基本戦略の①は、基本的に適切な内容だと思う。そのうえで、2点リクエストがあるが、①と②は、要はこれから外側への拡大をできるだけしないということであり、それに対して③と④は「しかしながら必要なら外も使います」と書いてあることから、ある意味対立している。つまり、①、②の基本的なスタンスと③、④は対立するのだということを押さえたうえで、その③と④はかなり限定的に動くのだという説明になっているが、そこをしっかりとするためには、「真に必要な質の高い開発」の判断基準やそれを認める行政的な手続きなどを、この仕組みを決める際に合わせて検討する必要がある。④についても同じ。

もう1点は、「⑤都心部における土地の高度利用」と「⑧歴史・文化を継承した魅力ある環境の創出」が対立する可能性が非常に高い。今までのよい雰囲気の場所を高度利用していくということは、ほかの都市、特に外国ではよく行われている。そのような意味で、ここも黙っていると対立する。これを進めるとすると、⑤の中にある程度、⑧についても、個別にコメントが必要かと思う。①から⑧について、この内側をしっかりと書くということであれば、⑤の中にこれを進める基準と、⑧を特に意識するようなことが必要だと思う。

(事務局) 確かに、①と②、③は、特に対立するものと認識している。まさに「真に必要な質の高い」というのを意識しているので、しっかりやっていきたい。⑤と⑧についても、古町花街など⑧の大事な部分があるので、その辺をしっかりと意識しながらやっていきたい。

(佐野委員) 1 ページ目左上の公共交通で、「新バスシステムや駅周辺整備等の公共交通を利用しやすい環境整備が進行しバス利用者の減少を抑制」とあるが、前半の部分は公共交通と言っていて、後半はバスという公共交通の一部になっているのは少し変なので、公共交通利用者にそそえた方がよい。

また、数値目標を入れるのであれば、目標の観点からは、増加ではなく減少抑制という現実的な話でよいと思うが、ネガティブな雰囲気が醸し出されているので、公共交通のサービスレベルを向上するなどの上向きな目標の方がよいと思う。

(佐藤委員) この新バスシステムのバス利用者の減少抑制ということで、どのようにしたらもっと抑制されていくのかという参考例ではないが、高速道路に乗ると、土曜日と日曜日は高速料金が安いので、友達も高速道路を利用して

出かけるということがよくある。新潟も、歴史的なものや美術館などの見どころのある場所へ行く際に、土曜と日曜はバス料金が市内一律で安く乗れるというようなメリットがあると、出掛ける人もこのバスを利用する人も増えるのではないかと思う。

(樋口委員) 新潟交通は新潟市と一緒にあって学生に3,000円分の割引を進めており、将来の利便性を高めてもらおうとしている。通勤・通学のことを意識しているのか、非日常のことを意識しているのか、この公共交通の一文からではこのバス利用者がどのような人に向いているのかが読み込めない。このバス利用者をもう少し分解して、佐藤委員の意見のような施策を含めて、様々な施策展開がされるとよい。

(鈴木委員) 今、低炭素のまちづくりなどのキーワードが、都市計画分野には出ているかと思うが、そういったキーワードがこの戦略でイメージしにくい。特にバス路線やJRなどは、もっと利用してもらうような戦略を描くべきではないか。道路の交通量をできるだけ抑えて、できるだけ公共交通の利用者を増やしていくような手立てを、少しメリハリをつけてやっていく必要がある。

メリハリというのは、やはり集客力のある拠点施設に公共交通でストレスなく移動できるように、重点路線を設定するなどと思う。新潟市では、サッカーの応援に行くときにバスに乗ると、バスも渋滞にはまっていたりするが、前に住んでいた仙台では、スタジアムまでは100円で、バス路線が優先になっており、渋滞にはまらないように、仙台駅からスタジアムまで人をスムーズに動かすような工夫をしていた。そのようなことを少しずつ積み重ねていくと、公共交通を使う分、まちでの滞在時間が長くなり、お金が落ちるような経済効果も生むのではないか。

産業面では、都心部の高次都市機能も大事だが、新潟は周辺部に工業団地が分散しているので、そういった団地の高度機能化、高次化というところで、優良企業を呼び込むために、高次化したスペックの高い工業団地を用意していく方針がある。特にイノベーションを起こしていく発想がこれから大事なので、そういった戦略も描いていけるのではないか。そのときに農村の共存というところが新潟らしさというところで非常に重要になってくる。産業面でも、農村、田園ということ意識して、ほかとは違う、働きやすい、環境のよいところで働ける新潟らしいイメージをつくってもよいのではないか。

また、中心部に大規模な河川が流れているので、⑧のトップに歴史文化だけではなく、水辺というところもしっかり強調し、この図にも河川の絵を入れる。河川軸と交通軸と、様々な人の流れも一体となった新潟らしい都市づくりを目指すというところで、様々なところで川の存在も強調した方がよい。

(事務局) 農と食というところについては、新潟市でもこれまでに農業特区ということで、かなり力を入れている。今の農・食というキーワードから、さまざまな技術、アイデアを持つ人材や結びつき、新たな価値を持つビジネスを創出するフードテックプロジェクトを今スタートさせている。その辺を含めて、食・農に関連したビジネスモデルはしっかりやっていきたい。

水辺空間についても、信濃川ではミズベリングなど、国と一緒にになってにぎわい創出に向けて取り組んでいく。

(樋口委員) 図には、河川空間が入るとよい。新潟は港町ということで、港もキーワードになるのではないかな。

鈴木先生が言う工業団地は、前回、線引き見直しで入れたところ。そこは重点的に様々なことをするとして、そことの整合性をとるとすると、1ページ目の市街化区域は既存市街地にあたるのか。編入されたところは、工業団地という意味でいうと居住誘導区域ではないかな。

(事務局) この6月に市街化区域の工業団地8区を新たに都市計画決定して工業団地に入れており、人や産業の活性化に向けて今、取り組んでいる。

また、都市再生緊急整備地域への指定も進めているところであり、ICT関連の企業から新潟が選ばれているところもあることから、古町から新潟駅周辺地区にかけて高度利用、簡単に言うと容積率の緩和にも取り組んでいる。

(樋口委員) 1ページ目の黄色い「市街化区域既存市街地」が、産業誘致などの重要な位置づけになるかと思う。⑦の多様なライフスタイル、ニーズというところに位置づけられているが、一緒にせずに分けた方がよいかと思う。ここに移住・定住と、産業・就労、観光・交流が全部一緒になっているが、やはりこの黄色いところは、既存市街地で「工業・流通等」と書いてあり、居住誘導区域から外れているので、そこにあえて移住・定住を位置づけてしまうと、かなり矛盾してしまうことになる。

また、左側の「都市活力・魅力」の2番目に地方創生や農業特区により云々と書いてあるが、ここはビジネスのことしか書いていないため、これを意識して⑦は分けて書いた方がよい。逆に言うと、この黄色いベタ塗りをされているところに、居住を誘導するようなかたちではない方が、立地適正化計画との兼ね合いもよいかと思う。

(富山委員) ⑦の多様なライフスタイルニーズに対応した土地利用をするシーンというところで、例えば移住・定住は西蒲区、産業・就労は中央区、観光・交流は、というように、どのようなライフスタイルニーズに対応した土地利用を推進しているのか、これを読んでいるだけではイメージが湧かない。

(事務局) ⑦については、低未利用地など、今使い切れていないようなところを使っていこうというなかで、社会情勢に応じて、既存の使い方にこだわらず、見直しも含めてやっていこうといった趣旨で書いている。先ほどの議論もあったが、詰め込みすぎているところがある。

様々な視点で、今ある既存のルールにこだわらず、見直しや、地元で勉強会をしながら変更していくということで、移住・定住の視点での使い方もあるということで書いている。先ほど、柳沢先生からもあったが、この①から⑧をさらに分かりやすく説明することで対応させていただく。

(樋口委員) 先ほどの公共交通の点だが、やはり高齢者や体の不自由な方は、車を運転しないので公共交通に移行する人もいるかと思う。そういった方々への配慮も、公共交通という部分に一番必要なかと思う。これから高齢者の方はさらに増えていき、そこで大量に免許を返納する方が増えてくるかと思う。そのような方がどこに住んでいて、どこに行きたいのかというニーズを把握すると、今、若者や子どもたちの通勤通学に一番焦点が当たっているが、これからは、高齢者に若干移行するかと思うので、配慮していただきたい。

(鈴木委員) 私の義理の父も、免許を返納した途端に買い物難民になり、ごみ出しまでも大変な状況になっている。そのような人たちの存在は、身近なところで増えていて苦労しているのではないかと思う。そうならないように健康都市で体力をつくるという方針も、もちろんあると思うが、戦略的なゾーンがはっきりしてきていると思うので、その地域、地域で戦略をつくる必要があるかと思う。おそらくこの辺のニーズは、そのような買い物をする場所ということになると、もう少し計画的な誘導を図り、市民の力も借りて行わないと難しいかと思う。

また、10年間の今回定めるビジョンを推進するだけでなく状況の変化に合わせてビジョンを変えていくような、柔軟性をもたせる計画のスタンスもあってもよいのではないか。

(2) 都市・地域づくりの方針について[全体構想後半部分の骨子案]

(事務局) 資料説明

(富山委員) 17ページの方針8「快適な住まいで暮らすことができる」のところで、「外国人や女性・子育て世代・若者等、リモートワークなど働き方の変化も捉え、様々なライフステージに応じた暮らしやすさを向上させる」とあるが、これが目標8-1のところに入っていない。目標8-1では、多様なライフスタイルに応じた暮らし方ができるということだが、ここに「ダイバーシティ」や「インクルージョン」といった言葉を加えることによ

り、外国人や女性、子育て世代という概念がよく伝わるのではないのかと思う。今、留学生を含め非常に優秀な外国人の方が新潟に来て起業をしている。そのような人たちが新潟のイノベーションを起こしてくれることにより、新潟が発展することが重要だと思う。そのような外国人の力をもっと活用できるようなまちづくりが重要だと思う。

また、女性が新潟に住みやすく、仕事もあり、女性が増えれば男性も来て、結婚してくれる可能性も増えるし、子どもが生まれる可能性も増えると思うので、それがまちの活性化につながるかと思う。この目標のところに、外国人と女性が入るような「ダイバーシティ」と「インクルージョン」、あるいは「包摂」という言葉でもよいが、それを加えるとよりニュアンスが伝わるかと思う。

(樋口委員) 消滅可能性都市の検討のときは、若い女性がいなくなると、そのまちはなくなるという前提であった。新潟市が女性に選択されるようなまちになればよいと思うので、目標 8-1 の内容は魅力的に書いてもらいたい。

(佐野委員) 6 ページ目の個性のある日本海拠点都市新潟の目標 2-3 のところで、新潟駅周辺に都心軸をつくるような話がある。3 つ目の段落で、「万代地区では、朱鷺メッセ周辺の交流機能の強化と、新潟駅、万代シティとの移動手段や移動空間の強化に取り組みます」と万代地区の強化のみ強調した表現になっており、古町や「にいがた 2 km」に関する記載がないと寂しい。この「にいがた 2 km」の都心軸というものに、公共交通も入っているという雰囲気を出してもらいたい。

(樋口委員) この 2 キロの移動がいかに容易になるのかということが、この「にいがた 2 km」の成功のカギを握っているように思う。

(柳沢委員) 最初に議論のあった土地利用の基本戦略、①から⑧の考え方は、今説明があった資料 2 で、それぞれの関連のところに染みこんでいるのか。それとも、基本戦略は別のかたちでどこかマスタープランの本体にそのままのかたちで出てくるのか。

また、取組方針は、ほとんどタイトルのような状態であるが、目標 2-3 だけかなり具体的に書いてある。今はタイトルとして、こういう事項を書きたいということが書いてあり、中身は後で書き込んでいくという前提なのか。

最後に意見として、目標 1-5 「将来にわたり適正な都市規模を維持する」は、都市の空間的な規模をこれ以上広げないということを言おうとしているかと思うが、この言葉だけだと人口が減らないで、あるいは経済活動が衰退しないで、都市として今の規模を維持したいというような読み方もできてしまう。目標 1-5 の 1 から 3 までを見ると、これは「都市規

模」ではなく、率直に「市街地規模」とした方が、分かりやすいのではないか。

(事務局) 先ほどの資料1の基本戦略は、資料2に溶け込んでいるのか、また違うところに出てくるのかという質問については、基本戦略は、資料2の方針1から8にしみ込んでいる。この考え方を目下において方針づくりを行っている。それに加え、参考資料1の18ページ第3章で「土地利用の基本戦略」というものを反映していくことも考えている。

(樋口委員) 方針にはかなり具体的な地名も多く入っているが、そこは漠然と捉えているのか。

(事務局) 方針については、まだ更新しきれていない。今回、委員の皆様から見直しの視点について意見をいただいたあと、その見直しの視点を基に、再度方針内容を更新したいと考えている。

(樋口委員) 4ページの目標1－5か。

(事務局) 市街地の適正な都市規模については、あくまで市街化区域の規模を意識して書いていたので、指摘のとおり、市街地の規模を維持するというかたちで、市街化区域の規模として修正する。

(柳沢委員) 土地利用の基本戦略については、何章かに溶け込んでいるとともに、別にマスタープランとして書かれるものがあるという理解でよいか。

また、取組方針については、今はタイトルだけだが、中身が書かれるのか。

(事務局) 資料2の4ページ以降にある「目標」と「取組方針」と右側に書いているが、これについては、まだ十分整理しきれていない部分がある。確かに、先ほどの目標2－2はしっかり書いているが、他の目標は書き切れていない部分があるので、これは本日の委員の意見を踏まえて、また追加、修正をしていきたい。

(柳沢委員) 今回はタイトルが妥当かどうかという意見を聞いているのか。要は、これでよいとなったら、このタイトルを基に、それぞれ数行ずつか、ボリュームはともかくとしてまた書かれるという前提なのか。

(事務局) 取組方針については、目標2－3のように、ほかの目標の取組方針も整理したいと思う。記載が十分でないところについては、また書いていく。

今回は左側の見直しの視点を見てもらい、右側の目標・取組方針については、次回の第4回で示したい。

(鈴木委員) 方針2の目標2-3都市の中心核をつくとあるが、万代や古町、新潟駅周辺以外にも、新光町、美咲町、鳥屋野、南部や北部など、中心核ほどの辺までを指すのか。この戦略のイメージでいくと、赤いところかと思っていたが、それ以外の地域も入っている。どのようなイメージを持っているのかを確認したい。

(事務局) 今は都市の中心核のイメージだったが、こちらに書いてあるのが、立地適正化計画の都市機能誘導区域に今設定されている部分を中心に書いている。7ページの図に書いてあるとおり、都心の重点エリアと機能集積エリア、白山駅周辺地区、新光町、美咲町のところが現在の都市機能誘導区域になっている。また、まだ都市機能誘導区域にはなっていないが、鳥屋野潟南部地区についても、様々な機能を集積していく拠点、ここでいう機能別拠点に位置している。これを合わせて中心核というイメージで書いている。

(鈴木委員) 市民に分かりやすくというところで、都心と中心核、重点エリア、「にいがた2km」など、様々な表現があるので、市民の方に伝えやすくという点で少し整理した方がよい。

(樋口委員) 「既成市街地」と「既存市街地」が両方書いてある。言葉の使い方で、統合できる部分は統合した方がよい。

基本的な質問だが、機能集積エリアを白山駅周辺と新光町、美咲町としているという話があったが、各区の地域拠点も、機能集積エリアと同等に扱った方がよいのではないか。立地適正化計画では都市機能誘導区域にされているのではないか。この絵の中では各区の地域拠点と書いてあるが、そこで機能集積を図るというイメージは、市は持っていないのか。

多様な機能が中心市街地に入っており、そこはすごく利便性の高いエリアということが、もう少し明確に分かるとよい。

(事務局) 各区のまちなかエリア、いわゆる地域拠点に位置するエリアについては、都市機能誘導区域に入っていない状況である。立地適正化計画を策定する際には、そこも入れられるかどうかを検討したと聞いているが、まだそこまで入れるに至らなかったということで、次の都市機能誘導区域の候補地として各区のまちなかエリアについては設定している。今後、検討の中でその議論をしたい。

(樋口委員) 立地適正化計画より都市マスの改定が後になるが、それをどう位置づけるかを先に考えておくと、次に立地適正化計画を更新するときに分かりやすくなるのではないか。都市マスでも位置づけをぼやかしておくのか。せっかく後からできるので、もう少し積極的な対応をしてもよいのではない

か。

(事務局) 今回、その都市マスを検討するにあたり、各区に今の状況や今後都市機能誘導区域にしていく予定はあるかというところも確認していたが、まだその段階までに至っていない。

(富山委員) この方針1から方針8を見ると、非常に分かりやすくはあるが、インパクトに欠けるかと思う。例えば、4ページのSDGsや、脱炭素社会に向けたまちづくり、ゼロカーボンシティのところ为目标1-2に反映されているということだが、これは環境に配慮した都市づくりということで、SDGsの部分は環境しか取り入れていない。国連が世界的にやっているの、この方針のところの1から8のどこに入るか分からないが、SDGsを掲げたまちづくりを方針のどこかに入れるとよいのではないか。

また、外国人のイノベーション力と女性の力ということ、新潟市はもっとPRすると魅力的なまちになるかと思う。方針の1から8のどこに入るか分からないが、「ダイバーシティ」、「インクルージョン」ということをPRして、新潟はそのようなことができるまちだと分かると、インパクトがあるかと思う。

(樋口委員) 全体を通してそのような見直しがあった方がよいということ。様々なまちの総合計画の策定のお手伝いをしているが、SDGsが前面に出てきていて、どの項目がどれに対応するのかを一生懸命に考えている。この都市マスも、今回の見直しがSDGsに配慮したものだということが前に出るとよいのではないか。

(樋口委員) タイトルについて、方針1のタイトルは一番最初なので、すごく大事だと思う。「自然・田園・市街地が共生する都市新潟」の「共生」という言葉について、共に生きているというのはありきたりなので、何かよい言葉がないか考えていたが、共鳴するなど、それが一緒になって高め合っていくというイメージがあるとよいのではないか。せっかく方針1で、この新潟は政令指定都市の中で田園の面積が多いなど、様々なよいところがたくさんあるので、高め合っていくということが伝わるとよい。

もう1つは、目標3-3の公共交通機関を有効に活用するというところで、今、新型コロナウイルスの関係で非常に厳しい状況だが、「観光都市、訪れてよし」と知事も言っている。市長もそのような考えだと思うので、このコロナが収まった後のことを考えて、観光やインバウンドには公共交通機関は非常に重要なので、市民という言葉は出ているが、外部から来た人たちが分かりやすく快適に移動できるという概念を、この目標3-3に取り込んでいただきたい。

(鈴木委員) 海外を含め全国各地で、シェアサイクリングやレンタサイクルといった

話が出てきている。多様な移動手段ということで、せっかくフラットな地形で坂もあまりないので、自転車などもうまく生かしたものができればよいのではないか。

また、新潟駅も高架化してかなり変わるということで、金沢市などは駅がかなり核になっているので、新潟駅をゲートとして、もう少し強調してもよいのではないか。強調というと、かなり網羅的なので、メリハリがつけにくい。この10年間、特に何に力を入れるのかということころは、どう変わるのかがイメージしやすいものがあるとしてもよいのではないか。それと同時に、柔軟な対応も必要なので、特に「にいがた2km」のエリアは市民のニーズや企業のニーズに徹底的に向き合ってもらいたい。そういったニーズをくみ取るプロセスのようなものがマスタープランにどう表現できるかが重要かと思う。

10年でかなり状況も変わるので、日々刻々と変化するニーズに向き合っていて、それに徹底的にスピーディーに対応していくような流れができて、賑わいを取り戻していくような流れや体制ができればよいのかと思う。

今、農村部や田園集落が頑張っても、中心部が元気にならないと農村部も共存できないので、田園集落と周辺部の中核の拠点エリアの機能、そこは準都市機能誘導区域になるかもしれないが、そこでカバーできない機能を中心部や都心、特に「にいがた2km」のエリアで補う。そして、その移動を公共交通の強いパイプで結ぶという姿が描けると、とても住みやすいまちになるのではないか。

(佐藤委員) この方針の1から8までで、何らかのアクションを起こしていかないといけない。例えば優先で考えているものはあるのか。12ページの方針5で、「安全で安心して暮らせる都市の新潟」とあるが、現実問題として、火災が起きたときに消防車が入れない道や、今回のように雪がひどくて、訪問介護の人たちが雪で道に入れないといった状況もある。基本はやはり誰もが安心して暮らしたいと思っているかと思うので、それらも考慮しながら、できるだけ早めにアクションを起こしてほしい。

(樋口委員) 都市マスに書いていないことは取り組めないで、何年に1回かは分からないが、異常気象ということで、雪害についても配慮していただきたい。雪のときにたどり着けないということは、火災のときにもたどり着けないことと同義であるので、空き家・空き地だけではなく、危ないところをあぶり出していきながら直していくのは、皆さんの安全・安心にもつながるかと思う。

4 その他

(1) 都市計画基本方針（たたき案）について

(事務局) 資料説明

(富山委員) 11 ページの「都心の拠点性向上に向けた取り組み」で、新潟には空港や港、JRがあり、高速道路も張り巡らされている。海外経済活動や交流の拠点、国際経済活動の日本海側の拠点といったニュアンスを入れるとよいのではないか。

(樋口委員) 多様な機能が新潟にはあり、それを結びつけるものが都心ということ。人口減少や高齢化ということだが、やはり若い人たちから新潟を選んでもらわなければいけない。もしくは新潟に残ってもらおうとか、出て行ったらすぐ帰ってきてほしいと考える中で、コンパクトプラスネットワークや都市のスポンジ化、4番の防災とまちづくりの連携は、若い人にとっては「新潟はすごいな」という感じがしない。唯一、3の都心の拠点性向上は魅力的かと思うが、1から4の中に、若い人たちが新潟に残ることや、もしくは新潟に帰ってきたくくなるようなワクワクするようなイメージが出せないか。課題の前の1から6で、若い方の視点がうまく織り込めていないかもしれないが、例えば若い女性の皆さんが新潟に残りたい、新潟で暮らしたいというものが、この今後の都市づくりの考え方の中にも織り込められたらよい。

(佐野委員) 12 ページの図で、横軸が量を、縦軸が質を表現しているが、オレンジの方向が、量も質も増加する方向に伸びている。これだと量の増加と質の向上の両方を目指していると読み取れる。以前のは質より量で、今回は量より質というのであれば、極端な話、量は減るかもしれないので、原点から垂直に伸びる矢印でもよいのではないか。これからは量より質の時代で、量はそこまで増えないことが想定されるので、もう少し立ててもよいのではないか。

(樋口委員) まさに方針転換でよい。

(柳沢委員) 最後の18 ページ、①から⑧は、都市計画関係の実務セクションで非常に重要な意味を持つてくると思うが、これもタイトルの表現にとどまっている。もう少し意味を書き込むようなかたちが望ましいかと思う。

(樋口委員) その背後に潜むようなものが一言あり、丸につながるとよいのかもしれない。丸のもう少し細かい意味も書かれるとよいのではないか。

(富山委員) 今後の都市づくりの考え方のところで、若い世代が新潟に魅力を感じるには、新産業の創出や雇用など、よい仕事があることが重要だと思う。今、IT企業が東京から集積しており、新潟版シリコンバレーのようなかたちで少しずつ発展してきている。例えば、新産業の創出や起業しや

すさなど、今後の都市づくりの考え方に入るとよいのではないか。今は足りないかと思う。今のような新潟版シリコンバレーの延長線上のようなかたちで、若者が魅力を感じて新潟で住みやすく、かつリモートで仕事がやりやすいなど、そういったものをPRした章を一つ入れるとよいのではないか。

(鈴木委員) できれば働き場所は、川の見える場所など新潟らしい空間とセットとした場所もあるとよい。

また、まちづくりの理念や目指す都市像で、2ページ目に「健康」と「創造的」という言葉が目につく。健康というところを都市マスでどう表現するかは難しいかもしれないが、にいがた未来ビジョンにも入っているので、どこかで表現した方がよい。それも、おそらく新潟らしさというところで生かせるかと思う。

創造的ということだと、先ほど他の委員からもあったが、若い人たちが住むことを考えると、クリエイティブな働き場所をどう創造するのか。隣の聖籠町は人口が減っておらず、外から働きに来る方々が外に働きに行く人よりも多い状況で、比較的高齢化率も新潟県内で一番低い。働き場所が東港中心にあり、若い人たちも定着して、外にも出ていかないというところで優良事例である。今、ミスマッチが起きていて地元で働けないが、コロナ以降、おそらく地元で働きたいという方々が増えてくるかと思う。そのときに受け皿があるかどうか、魅力的な働き場所があるかどうか焦点になるかと思う。

魅力的な都市像、まちづくりの理念と連動して働き場所をつくる。そして、さらに健康も追求して、空間の魅力性も兼ね備えてとなると、非常に新潟らしい快適な都市像がここに見えてくるのではないか。

(樋口委員) 新潟未来ビジョンは上位計画なので、それを取り込みつつ、都市でどう表現するのか、検討していただきたい。

(大花氏) 14ページに都市づくりの理念とあり、楕円形が2つあって、全市レベルと生活圏レベルとある。生活圏レベルがどういう定義なのかはよく分からないが、これからのポストコロナ、アフターコロナの時代だと、おそらく生活圏というものは身近な生活領域を大事にする、身近な都市空間を大事にするようになってくるかと思う。一方で、コロナで場所に依存しなくなってくる流れもあるので、この全市レベルと生活圏レベルに分けて考えるというのは、これからはどうなのかと思う。この生活圏レベルの楕円形は小さいが、全体的に横串に入るような感じで、何か大きい楕円形と重なってくるのではないか。

(鈴木委員) 新潟に来て3年目で素朴な疑問だが、子ども世帯の親と話しをすると、

新潟の都市規模だと、アウトレットモールや大型のI K E Aやコストコのようなものがあってもよいのではないか。山形県上山市のコストコに行くが、新潟ナンバーがかなりある。帰りもコストコの袋を持った人たちと、新潟県内で遭遇する。そういった若い人たちのニーズが少なからずあり、県外におそらく消費行動がある。群馬や石川、富山に行ったり、仙台、山形に行ったりということが起きているのではないか。新潟にはなぜ、そのような企業やお店がないのかということが素朴な疑問なので、そのような話や方針があれば教えていただきたい。誘致した方がよいかと思う。

(事務局) そうすると、古町と被るなどの様々な議論が出てくる。メリットはあると思うので、そういった部分も十分検討したうえで誘致なりということになるかと思う。

(樋口委員) そこはだいぶ議論になるところだと思う。人口が減少するなかで財布は一緒なので、どこかにお金が流れると、どこかは極端に減るため、世界中でみると大型商業施設を歓迎するまちもあれば、歓迎しないまちもある。歓迎しないとすると、そのニーズを満たさなければいけない。人を外に出さないと言っておきながら、魅力がなければ外に出てしまうので、そこはうまく回さないと、全部が駄目になってしまう。誘致をすればよいというものでもなく、かといって呼ばなければよいのかということも違うように思う。

5 閉会

【配布資料】

- ・ 第3回 新潟市都市計画マスタープラン策定検討委員会 次第
- ・ 第3回 新潟市都市計画マスタープラン策定検討委員会 出席者名簿
- ・ 第3回 新潟市都市計画マスタープラン策定検討委員会 配席図
- ・ 資料1 土地利用の基本戦略案
- ・ 資料2 都市・地域づくりの方針について
- ・ 参考資料1 導入部分、全体構想前半部分（第1～3章）のたたき案